

# 世界につながる

## 町の未来に向けて 僕もここで頑張る

地震直後、勤めていた会社の復興支援プロジェクトで東京から益城町へと派遣された中村哲さん。今は益城町を拠点にさまざまな仕事をしています。外部の人間として益城町と関わり始めて10年、中村さんの胸のうちに生まれた変化とは。



### 町の支援者ではなく パートナーとなる

熊本地震が発生した2016年4月当時、僕は東京都に在住で、コンサルティング会社「株式会社野村総合研究所」に勤めていました。同社の「震災復興支援プロジェクト」の一員として益城町役場に派遣されることになったのは、6月中旬のこと。最初の打ち合わせのとき、空港から車で寺迫の交差点まで来たとき、様相がガラッと変わって。純粋に「何が起きたんだ」と思ってしまった状況でしたし、「僕に何かできる？」という戸惑いが一番強かったです。それまでの業務経験を踏まえた支援プランを準備していましたが、「これは全然違うかも」「実情に即しているかいかすら分からない」と。役場に着き、準備したプランを



説明しながら、自分がすごく上滑りしていることに、恥ずかしさと申し訳なさを感じました。

復興課長から、「復興計画を急いで作らなきゃいけない。その中で産業や福祉の部分を手伝ってほしいんだけど、できますか？」と要望がありました。そう聞かれたら「できません」と答えますよね。帰りに空港で飛行機を待つ間、プリントの裏に、何をしなきゃいけないかを書き出したことを覚えています。

6月下旬から、益城町役場での常駐を開始。「やらないかん（しなければいけない）ことがいっぱいありそうだな」とは思っていました。国や県との打ち合わせに益城町側のメンバーとして参加した際、町が国や

県からいろんなことを言われたり、聞かれたりするのを一緒に対応する中で、「支援者というより益城町のパートナーとして働く」と覚悟が決まった気がします。

### いろんな話を聞かせてもらって ありがたい立場だった

復興計画をつくるプロセスの中で印象に残っているのが、住民意見交換会です。僕は後ろに控えていて、トイレに行く方を案内するためについていくのですが、僕が役場の人ではないと分かると、普段言いがちのこともいろいろ話してくれる。僕のような立場だから聞かせてもらってもあるんだと思いつながら住民のいろいろな話を聞いていました。

意見交換会を20回以上開催しましたが、途中どんなに住民の方々からやんやん言われた回でも、毎回最後は拍手で終わる。みんな大変だ、頑張ろう、という一体感が生まれる感じ。そんな皆さんの優しい姿が、純粋にすごいなと思っていました。

復興事業では僕は産業分野を担当していたので、被災現場を見ることが以上に、農家・事業者の皆さんの声を聞くことが大事でした。農業関係者にヒアリングをした際、その第一声が「もう俺らは農業は辞めてよかと思ってるもんな」だったことが印象的で。現実を目の当たりにしたことも覚えていきますね。

2016年12月に復興計画ができた時点で派遣終了の予定でしたが、その後も派遣期間を約2年半延長してもらいました。その間は産業復興に関する支援やまちづくり協議会の



PROFILE

1977年、福岡県生まれ。19年間のコンサルティング会社勤務を経て、2019年に益城町で「合同会社じもとピークル研究所」を設立。

立ち上げ支援、「復興ニュース」などの情報発信支援に取り組みました。また、木山地区の区画整理の支援にも関わらせてもらいました。

区画整理の支援は、「区画整理っていうのはどういふものなんだ？」という地元の方からの質問に答えるところから始まりました。話し合いの場に僕もついていき、議論の中で断片的に出てくる住民の方の「こうなりたい」という意見を資料にまとめて、また議論するという感じでした。その過程で地区の方とだんだん仲良くなって、町職員ではない立場でいろんな意見を聞けて。なので町vs住民になりそうな場面でも、その間に立つ立場でいれたと思います。

地震前の町のことや町の歴史についてはすごく勉強しました。本当は過去から未来までつながっていくはずだったのが、地震で途切れてしまった。だから、町の未来を考える

が外から来てくれるんじゃないかと、益城の人がどこかのために出ていくっていう町になったらいいな、と。そういつた想いもあって、人材の供給基地になる」という言葉も復興計画に入れたし、自分もそれをちよつとずつちよつとずつ、実現していかなきゃなと思っています。

いつか町の復興支援の仕事は終わると思いますが、その後も益城町にある会社としてやるべきことを一所懸命にやるだけ。町からいただいた多くのチャンスへの感謝を町に返すためにも益城町に本社を置きながら、会社を大きくすることが今の目標です。仕事も外にどんどん広げたい。全国、世界中、いろいろなクライアントから、「一緒にやりたい」と求められる企業が益城町にあるというのは、面白いよなと思っています。いつか益城本社、ニューヨーク支社とかいう会社になれたら、かつ

ためには、その前を知っておくべきだと思って。それは今でも変わらないかもしれません。

「益城のために」から「益城でやる」に

2019年、益城町で起業しました。でも、町の復興のためにキャリアを捨てたとか、そんな感覚は微塵もない。なにかすごい選択をしたわけじゃないです。

当時は東京の会社でも複数のプロジェクトを抱えていて、熊本と東京を行き来している状態でした。自分がその場にいられなかったせいで東京の仕事でトラブルが起きたことがあり、「両方でやるのは無理だな」と。今、益城でまだやるべきことがあって、これは自分がやれることだし、やるべき仕事だろうな。じゃこつちをやるか。そんな感覚でした。自分でできる仕事がある。うん、そ

こいいですよね(笑)。もつと優しい町になれるし、みんなの前を向けると思う

地震から10年。僕は地震の当事者でもないし、復興の流れの中にいるわけではなく途中で合流したにすぎない。復興したかという問いには答えられません。ただ、復興したと思う人と思わない人がいる状況が続く限り、まだ町が復興したとは言いきれないと感じています。これは世代が変わるまで続くでしょう。

だからこそ、10年というタイムイングは、「1回、みんなの前向かっていう腹決めしませんか」というのが今の状況なんだろうなと思います。

「未来のことを考えよう」という言葉が無神経に聞こえる人もいると思います。でも、お互いの状況を理解しようとする優しさや寛容さを持てれば、みんなの前を向けると思う

れが大きかったですかね。純粹になんか仕事人としてそう思いました。

そうして益城町で「じもとピークル研究所」を立ち上げました。主な業務は、益城町の復興アドバイザーとして町のいろんな業務支援、まちづくり会社「未来創成まじき」の運営やその中でワークキングススペース「Connect」の運営サポートなどの益城町での業務と、主に熊本県内での地域振興や企業マネジメンツの支援などです。

起業してからは、「益城のためにやる」から、「益城でやる」へと意識を変えたのかもしれない。復興計画をつくっていたころ、「自分で事業をするという人材がどんどん出てくると面白いし、そういった人材が『益城から日本中、世界中に出ていく』となったら、復興したと言えるんじゃないか」という議論をしていました。益城のために何かをする人

し、そんな町になってほしい。基本みんな優しいので、だからこそそれをもつと意識して伝える必要があると感じるようになりました。だからまずは、僕自身が寛容であることを心がけています。

会社のミッションに「知をつなぐ」を掲げています。「知る」ことはとても大事。知ること、考えや感情の引き出しが増えていくし、それで寛容になれると思うからです。いつか「知る」がつながるような場所、たとえば学校とかを作ってみたい。そんなことも夢見ています。

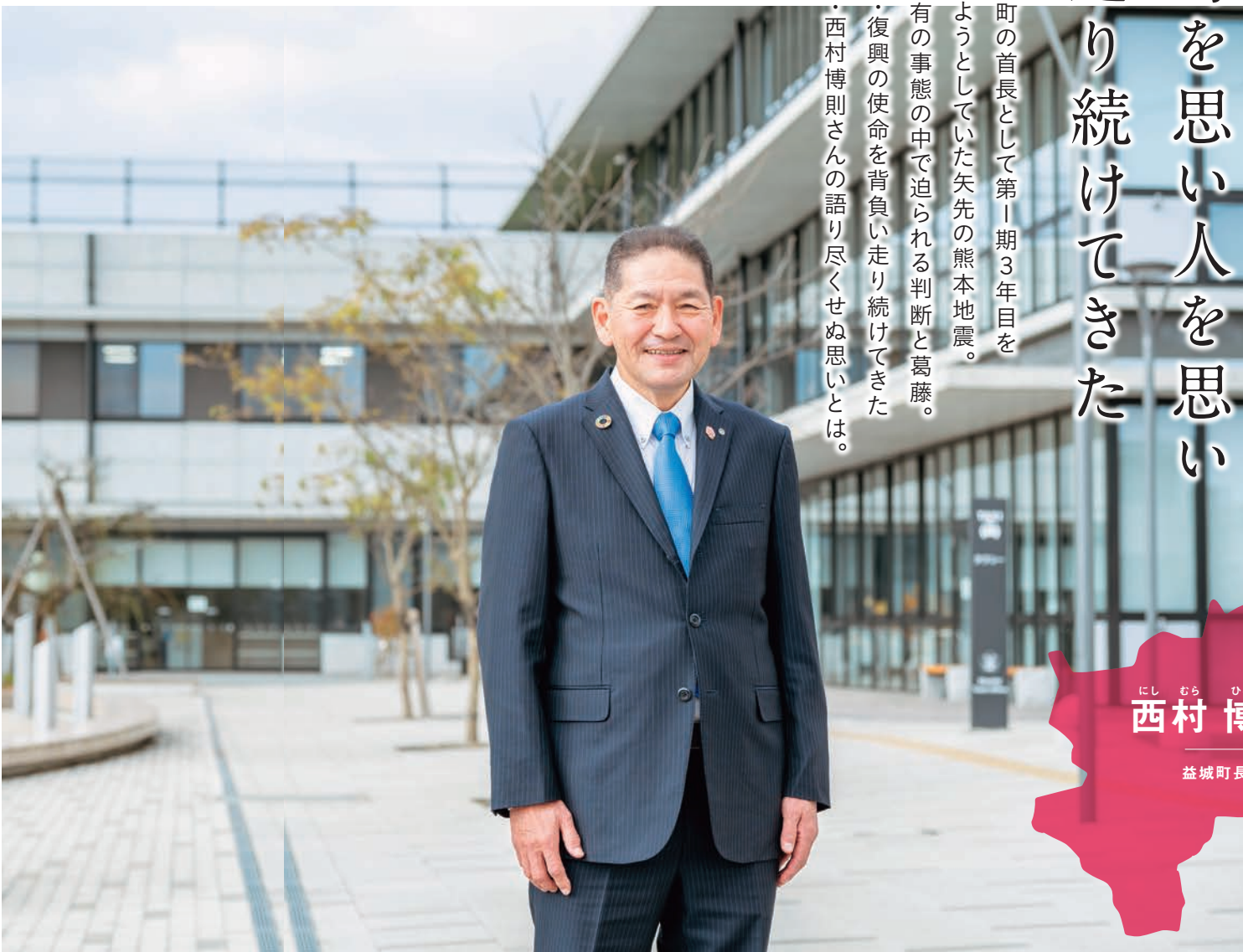


# 決断と葛藤の嵐の中

## 町を思い人を思い

## 走り続けてきた

益城町の首長として第一期3年目を迎えようとしていた矢先の熊本地震。未曾有の事態の中で迫られる判断と葛藤。復旧・復興の使命を背負い走り続けてきた町長・西村博則さんの語り尽くせぬ思いとは。



### 脳裏から離れない あの夜の光景

地震から10年。語り尽くせぬほどの多くのことが、走馬灯のように駆け巡ります。

脳裏から決して離れないのが、寒い夜空の下、役場に避難されてきた300人以上の人たちを不安にさせていた光景です。余震が来るたびにどよめく声、女性や子どもたちの悲鳴、携帯電話の緊急アラート音、上空を旋回していたヘリの音…。今でも何かにつけフラッシュバックします。

2016年春、益城町長として3年目を迎えるときでした。あの夜、久しぶりに自宅で妻とくつろいでいた私はただならぬ事態に「大変なことが起きた…。前震の数分後には役場に向かっていました。

ことも。おっしゃる通りでした。

当時、私は葛藤の中にいました。「本部での判断や指揮は決して間違っただけならぬ」、でも「いち早く避難所に駆け付け被災者を見舞わねば」。全ての判断と決断が町長に集中する中、次々に訪町される大臣や国・県の職員に状況の説明や要望を伝える重要な任務も錯綜しています。苦渋の決断の末、しばらく経ってから亡くなられた方々の全ての現場に伺い、手を合わせて冥福をお祈りしました。発生から49日間は自宅に戻らず、私なりのお用いをさせていただくことにしたのでした。

自宅も被災しましたが、妻が「家のことは何とかするから。心配せずに仕事に専念して」と気丈に振舞ってくれたのが心強かったですね。家のことを任せて被災対応に集中できたのは、家族の支えがあった

詳しい状況がつかめない中、最も

案じたのは火災。広安校区で1件の火災が発生しましたが、防災訓練中の消防団が駆け付けてくれて、被災した道路を進み断水状態の中でも消火活動に当たってくれました。

益城町は地震前、地震発生率が0.9%とされていました。そこへ起こったまさかの惨事。町のトップとしての防災意識の甘さを突き付けられたのは言うまでもありません。それからというもの、私は多くの判断と決断を迫られました。どれも待ったなしの案件ばかり。寒空の下、毛布1枚で過ごす避難者の姿がテレビで流れ、その状況を見た人から「どうして屋根のある施設に避難させないんだ」と、非難の声が寄せ

られました。

避難先に検討されたのが、役場から1キロ離れた総合体育館のメインアリーナ。しかし、二次災害の恐れがあるとして消防、自衛隊、警察と相談し開放しないことを決断しました。そして16日の本震でアリーナの天井は崩れ落ちてしまったのです。もし開放していたら…。安堵とともに、背筋が凍りつきました。

### 失われた尊い命へ 49日間の弔い

地震では多くの方々の尊い命が奪われました。発生から10日ほどが経ち、ようやく各避難所を見舞うことができたのですが、「なんで今頃、葬式にも出らんぞ」と叱責を受けた

## PROFILE

1956年、益城町生まれ。2014年5月に益城町長に就任し3期12年、町政を担う。高校時代は野球部。毎朝5時に起きランニングで汗を流して登庁。楽しみは妻の手料理。



からこそでした。

### 生の声をまとめた 震災記録誌を制作

壊れてしまったまちづくりの原点となったのが、地震の3カ月後に開いた住民説明会です。何より民意を尊重し、校区を分けて計21回、また全ての仮設住宅にも伺い、約1600人の町民の方々と夜遅くまで意見を交換させていただきました。「擁壁が崩れた」「田んぼに亀裂が入った」「消防小屋が壊れた」という支援枠以外の案件の要望も多く聞かれ、どんな小さな声もくみ取って国や県に対し要望しました。

県道熊本高森線の4車線化には賛否両論ありました。それでも計画を押し進めたのは、地震発生直後、沿道の建物や塀が道路に崩れ、救急車や消防車も通れなかったことや、町民の避難に支障を来したという、防

災に対する深い反省によるものです。

受援計画の不備や初動対応の遅れを含め、町が取り組んだ被災対応の全てを記録として残そうと作ったのが「益城町震災記録誌」（2020年4月）です。「首長や管理職への付度は一切無用。全ての事実をあらさまに残すように」と指示。生の声をまとめたこの震災記録誌は、のちに各地で起こった災害対応に活用されています。

24年の元日に起きた能登半島地震でも被災自治体にすぐに記録誌を送りました。郵便物が届けられない被災地には電子データで送信。職員の派遣要請にも「あのときの恩返しをしたい」と50人以上の職員が手を挙げてくれて。彼らの意志が誇らしく、うれしかったですね。

この10年は、コロナ禍に阻まれ、豪雨災害にも見舞われるなど、常に試練を痛感した日々でもありました。だからこそ「日本一安全・安心で災害に強いまちづくり」を目指してきました。その施策の一つとして避難路や避難地の確保、整備があります。避難地には防災倉庫、手押しポンプ、かまどベンチを備え付け、自主防災組織も結成。総合防災訓練や図上訓練も積極的に実施しています。

復興は道半ばという思いの方もおられるでしょうが、多くの人たちの苦しみや悲しみにより停滞していた日々は過ぎようとしています。町民主体のイベントが積極的に開かれるようになりました。また、新しくなる県道熊本高森線には、ポケットパークや駐輪場の設置を進めており、県道を活用した「歩きたくなるまち」（ウォーカブル構想）を目指しています。人と町が共にふるさとを

### 職員たちへの感謝 つらい別れも…

復旧・復興に尽力してくれた職員には心から感謝しています。誰もが被災しているにもかかわらず、役場や車の中に寝泊まりしながら任務に当たってくれました。中には涙目になつて従事する職員もおり、心のケアを必要とされた時期もありました。

「1週間に半日でもいいから休んで」と職員に強く指示を出して3カ月ほど経った頃。考えてみれば誰も私に「休んでください」と言ってくれないなど。ある課長からは「町長は頑丈だけん（だから）大丈夫でしょ」と返されました（笑）。今では笑い話ですけどね。

つらく悲しい別れもありました。地震から2年ほど経った頃のことです。役場職員だった時代の部下に、

盛り上げる思いや力が、復興の一つの証しになるのではないのでしょうか。

最後に付け加えたいのは、この10年、私を励まし、支え続けてくれた妻への感謝です。45年前、私たちは新婚旅行で軽井沢のクラシックホテルを訪れました。けれど当時の二人は、そこが格式あるホテルだとか、ジョン・レノン夫妻が過ごした場所などとは知らず、その素晴らしさも分からずじまいでした。「もう一度、訪ねてみたい」と口にする妻を連れて、今度はゆっくりと滞在し、感謝の気持ちを込めて労いたいと思っています。

キラキラした瞳から伝わる思いは本物でした。地震後も他の職員同様、懸命に任務に当たり、自治大学校（地方公務員に対する中央研修機関）への派遣を楽しみに励んでくれたのに…。仕事中に突然、彼は帰らぬ人となりました。優秀で大切な仲間を失った無念さ、彼のまっすぐな瞳と笑顔。胸の中から消えることはありません。

### 人と町が共に ふるさとを盛り上げて

復旧・復興の文字を掲げて進んだ



つらいだけじゃない

# 笑えたことが 前に進む力に

地域の消防団として、若手農家として、この10年を乗り越えてきた福永貴大さん。被災、復興で大変なさなかにあっても喜ばれる声、仲間と笑い合えたことが背中を押してくれたと話します。



得体の知れんものが  
地面を這っていった

福田グラウンドで消防団が操法大会の練習をしているのを見ていたとき、最初の揺れに襲われました。なんかもう、ガーンってなってる。地面がうねって。「これはやびやあど(やばいぞ)」。いったん自宅に戻ると、家は瓦一枚落ちておらず家族も無事。でも余震は続いていたので、ひとまず家族を車に避難させ、第4分団第6班の消防団の仲間と被害のひどかった木山・広安地区の応援に駆け付けました。それから総合体育館前の橋のたもとや砥川のコンビニの前で通行止めの誘導に当たったんです。

翌日、本団から「それぞれの地元を巡回してくれ」との指示を受けましたが、私が住む福田地区は被害も。しこしかできんけん(できることしかなないんだから)、やれるだけやろうって感じで。

## 地域のお年寄りと 軒下で避難生活

自宅も農作業小屋も危険な状態でしたが、米農家を営むわが家の鉄骨製の乾燥小屋は唯一無事でした。被災直後からしばらくはそこで、家族と近所のお年寄りも一緒に軒下避難をすることになりました。

総勢15人分の食事は、火を起こし薪をくべて…という原始的な作り方になったけど、祖父の時代からの生業が林業なので薪は山ほどある。米ももちろんある。水も何とかなる。そんなら羽釜でご飯を炊こう、おかずやみそ汁を作ろうということになったんです。しかし嫁さんたちは要領がつかめず右往左往…。そこで



そんなに大きくなくて。しかしその日の夜中に本震が発生。そのときは福田郵便局の交差点で警備に当たっていて、大きな揺れに立っていることができずに倒れ込んで、四つん這いになりました。気付かんだったけど膝を擦りむいて。二度の大きな揺れをいづれも私は屋外で体験しました。

前震の衝撃ではまだ耐えていた自宅と農作業小屋も、さすがに本震で倒壊寸前に。最初の地震を案じた知人からの電話に「家は大丈夫だったですよ」と答えたんですが、その2日後の電話では「(家は)なんもないです」と。

ずっと出ずっぱりだったんですが、「地元の被害を見てくれ」との

ことで戻りました。でも自宅周辺は瓦や塀のがれきでガラガラになったって通れんと(通れないん)ですよ。消防の積載車を途中で置いて歩きながら、倒壊した家に閉じ込められた人たちを救助しました。中には、こたつの横に寝とらして、落下した梁がこたつで止まって命拾いした人もいましたね。でも残念なことに福田地区では関連死も含めて数人の方が亡くなられました。

地震の1週間前に、入団した新人たちに消防団の活動をレクチャーしたばかりでした。彼らは「聞いてないです、こんなの…」と青ざめ、「俺も知らんぞ、言ってるやあて(言っていないって)…」って。初めての体験ばかりだったけど、まあ、しきる

## PROFILE

1986年、益城町生まれ。祖父の代から林業を生業とし、18歳で家業を継ぐ。津森から広安に及ぶ約28ヘクタールの田んぼで米作りも行っている。



お年寄りの出番となるわけです。

「昔はこがんと(こんなこと)ばかりだったたい」。すばやく火を起すすと、「畑から野菜ばとってくるけん」「ちよいと漬物ば家から持ってくるな」と大活躍。トイレも、近くの畑に鍬で穴を掘って用を足すよう指示するなど、先輩たちの知恵と経験があらゆる場面で発揮されてました。「怖かけん一緒に居させてほしか」と心細そうに集まってきたそれぞれの顔に、「亀の甲より年の功」とばかりに元氣な表情が戻ってきました。

けどやっぱり高齢者が多かったから、いつ体に変調を来すか分からんですよね。せめて救急車が通れるようにと、近所に住む水道工事業の方と協力してユンボで周辺道路を簡易的に整備しました。

共同の軒下避難から数日が経ち、親戚に頼んでおいたコンテナが運ば

来てくれて、本当に助かりました。

新たに引き受けた田んぼが増えたのと、例年より遅くなった6月中旬からの田植えは7月の暑い時期までかかって。あんとときの田植えがこれまでで一番きつかったな。でも「今年は諦めとったばってん、こつで米が食べられる」て喜ばれたからよかったです。それ以降、米作りの依頼がどんどん増えて。いろいろ頼まれる中で明らかに無理なことは無理で言いますけど、「とりあえずやってみるか」で動くのが私の性分というか、そういう生き物なんじゃないかね。

あれから10年が経ち、高校3年になる長男と高校2年になる次男が家業を継ぐと言ってくれています。中でも次男は農作業が好きで、休日にも一日中圃場ほらばにいるなんて全然平気。「お母さんが弁当持ってくるけん」「燃料がなくなったらばあちゃんに

れてきました。畳や布団を敷いてお年寄りや両親たちの寝床を作ってあげると「足ば伸ばして寝らるる」って喜ばれて。「このまま出荷しようか」なんて冗談言ったり(笑)。

幼いわが子たちが怖がっていなかったのも救いでした。次男は小学校に入学して3日目に被災したわけですが、「しばらく学校には行かんよかとだろ。やったあ」と脳天気なもの。どんな最中にあっても人は笑えるし、食欲も湧く。そんなことを感じました。

### 廃業農家の米作りを一手に

自宅敷地にプレハブを建てて仮住まいとし、4カ月ほど過ごした後で平田仮設住宅に入居。自宅再建のため近くの田んぼを宅地造成し、土壌が安定するまで2年ほどの時間をかけることにしました。

電話しろ」と放ったらかしのスパルタですが、要領も覚えもよく頼もしい限りです。

### あんなときでも笑えたよね

今も消防団仲間との酒の席では、地震直後の話題が上ります。けれど、大変だった思い出より、今だから笑えるという話の方が多いかな。

そう言えば警備や巡回を続けていた頃のこと。何日も風呂に入れずにいて、コンビニにタバコを買いに行ったら後輩がシャンプーを手にして戻ってきたんです。「おーし、なら川に行くか」と繰り出し、裸になってガキの頃のように水をかけあつて。思った通り次の日は全員、風邪をひきました(笑)。つらかったことを引きずるより、あんなときでも笑えたよねという出来事を思い出す方が前に進める気がします。

通常の生活は仮設住宅でも十分に取り戻せました。家を失ったのは誰が悪いわけでもない。自分だけがそうじゃなくて、みんなも同じだから。倒壊した家々の解体が進むにつれ、見慣れた景色が変化していく。すると、以前は何があったつけ…となかなか思い出せなくて。そうやって、人間の記憶や感覚はアップデートされていくんだな。それが生きる力というか、人間のたくましさなんだな、と思ったものです。

一方で、地震の影響の大きさを痛感したのは、周囲の高齢農家さんの廃業でした。「農機具も小屋も壊れたけん農業やめる」という声が多くて。やめる農家の田んぼを引き継いだり、その年だけ代わりに作ってくれという依頼を受けたりすることが増えましたね。苗作りが結構大変で。ボランティアで大分の立命館アジア太平洋大学の学生さんたちが十数人

町の復興を思うとき、地震前より災害に強い町へと着実に進化していると思います。また何か起きたらそのときに考えるしかない。怖がるのではなく、これまでを乗り越えてきた人間の力を信じたいと。

話は変わりますが、2024年の春まで消防団の分団長だった俺の仕事は加入団員のスカウト。なんさん(とにかく)見つけんといかんくて。誰か手ば挙げてくれんかな(笑)。



すべてが終わったと

思ったあの目を越え  
今を楽しく生きる

夫の生家である古民家を再生し、カフェと洋服店を営んでいる古荘佳代さん。地域活動に忙しい夫に翻弄されながら自分らしい生き方を見つけ、この10年を過ごしてきました。

ふるしろうかよ  
古荘佳代

「お洋服とカフェsala」オーナー



泣いた後に浮かんだのは  
なんとかなるさという思い

前震が起きたとき、わが家ではオーストラリアからの留学生を受け入れていました。「そろそろ寝ようか」というとき、ガッシャーンという家じゅうのガラスが割れる音とともに、家の中が上下左右に激しく揺れて。机の下にもぐり込む余裕もなく、まったく動けませんでした。

留学生の女の子は留学初日ということもあり、パニック状態。大切なお子さんを預かっているから、自分たちのことよりも、まず彼女を守らなければ、という気持ちが先に立ちました。その日は車中で一晩を過ごし、翌朝、予定を早めて次のホームステイ先へ送り出しました。

自宅の中の状況はひどいものでした。重い玄関の扉が外れて、家の中

も家族の写真などが散らばってぐちゃぐちゃ。住む場所も、今まで自分が築いてきた家族の歴史も、一瞬で「すべて終わってしまった」と感じました。

当時私は、熊本市内で洋服店を営んでいました。しばらくは店を休まざるを得ないと、休業のお知らせを作成するために、自分の置かれていた状況を文章にしてみたんです。家の中がぐちゃぐちゃになってしまったこととか、自分の気持ちを文字にしていくうちに、大勢の人前でこらえきれずに、嗚咽するほど泣いてしまいました。

子どもたちも、そんな私を見るのは初めてでびっくりしたようでした。

でも、涙が枯れるほど泣いたらスッキリして気持ちが軽くなったんです。「アトックスして吐き出した」という感じでしょいか。「まあいいや、なんとかなるさ」と気持ちがフラットになって。それからは自分のちの生活を取り戻すために、掃除や片付けを淡々とやるだけでした。

私は何でも自分でやる性格。だから、避難所には行かず、半月くらいは自宅の敷地で車中泊をしながら、キャンプのような生活をしました。近くに地下水が湧き出ていたのも助かりましたね。次第に「もう一度やり直せるかもしれない」と前向きになれて。何より家の建物自体の被害が少なかったことがありがたかったです。

私たちの家は25年前、大工だった父が建ててくれました。実家がある北九州から出向いて、筋交いなどを多めに入れてくれて、強度もしっかりと造り上げてくれました。完成した家の前で父が「この家は少々の地震じゃ、びくともせんぞ」と自信満々に話したものです。

地震後のゴールデンウィークに父が家の修理に来てくれて、筋交いを少し調整しただけでそれ以外は大きな問題もなく。そうやって少しずつ家を元の状態に戻しながら生活を再開しました。

簡単じゃない

古民家再生の道

夫は益城町で生まれ育ちました。消防団員として活動する一方で、櫛島地区まちづくり協議会の会長として地域づくりに取り組んでいます。

## PROFILE

1973年、北九州市生まれ。99年、古荘直樹さん(現・  
櫛島地区まちづくり協議会会長)と結婚し、益城町へ。  
築150年の古民家で洋服店兼カフェを経営。



彼の地域への思いが深くなったきっかけは、地震のときの「あの体験」だったんじゃないかなと思います。

被災直後、地域の消防団は倒壊した家屋からおばあちゃんを救出したり、治安パトロールをするなど懸命に動いていました。夫もすぐに駆けつけたかったのでしょうけど、お話ししたように、私たちは受け入れていた留学生を安全に送り出さなきゃということとで頭がいっぱいで。活動に参加できなかった後悔が残ったんだと思います。

夫は地域のおじいちゃん、おばあちゃんにかわいがられて育ちました。地域の花見や運動会での楽しい思い出もたくさんあるそう。でも、時代の変化とともにそうした行事も少しずつなくなり、人が集まる機会も減ってしまいました。さらに地震によって、皆さんの心が沈んでいくのがたまらなかったんでしょう。

と夫は例のごとく。ちょうどその頃、私が経営していた洋服店が建物の都合で閉店せざるを得なくなったんです。そこで夫に「この古民家を私に使わせて」と言うと、すごく喜んでくれて。以来、洋服店とカフェを営んでいます。お客さまがこの空間を楽しんでくださっている姿を見ると「やってよかったな」と思います。振り返ってみると、ここでお店を始めたことは、「最初からこうなることが決まっていたんじゃないか」と思えるくらいの出来事でした。カフェ経営の経験はなかったんですけど、夫が人を家に招くのが大好きで、結婚当初からホームパーティーをよく開いていました。次第に料理やお菓子のレシピも増えて、その経験が今に生きています。不思議なんですけど、いろんなことが知らないうちにつながって、形になっていくんですよね。夫は外国

「もう一度みんなで集まれる場をつくりたい」と、昔からの行事などを復活させました。

とにかくエネルギーシユな人で、そばで見ている私は「なんでこんなに熱いんだろう」って思うくらい。きっとその原動力は、育ててもらった地域への恩返し気持ちや、地震を経験し、自身が年齢を重ねていく中で深まっていった地元への思いだと思います。

以来夫は、地域のことになると真っ先に出かけていきます。すごくいいことをしているのは分かるし、立派だとは思いますが、家族のことは後回し…というのが正直、私にとってはストレスでした(笑)。

同じ敷地にある、夫が生まれ育った築150年になる古民家を再生すると決めたときも、まさにそうでした。地震で「全壊」の判定を受けたので、家族や親族とも話し合い、公

人もこの古民家に連れてきます。そして「民泊でもしようかなあ」なんてまたまた夢を語るんです。いつも私の役割は「ストッパー」。じゃないと、彼はどこまでも突き進んでしまいそう(笑)。北九州市から益城町に嫁ぎ、3人の子どもたちに恵まれ、地域の皆さんにも優しくしていただいています。こうして幸せに暮らせているのは彼のおかげだなと感じています。子どもたちは夫の行動力に半ば呆れ気味ですけど、それでも父親のことを尊敬しているようです。現在、子どもたちとは別々に暮らしていますが、夫が企画するイベントのときには帰ってきて手伝ってくれます。私もケーキを焼いて出店したりと、結局は協力しちゃいますけど(笑)。この10年間いろんなことがあったんですけど、落ち込むことはなかったですね。「将来をどうしよう」と

費で解体することに決めました。ところが、解体するぎりぎりのタイミングで「やっぱり解体せずに再生する」と言い出して…。簡単に言うけど、莫大な時間と費用がかかるわけです。当時、双子の子どもたちが大学進学を控えていたこともあり、「現実的じゃない」と猛反対しました。古民家を再生した後の目的や活用のビジョンもなく、「もったいない」の一点張りで、3カ月くらいは口も利かない相当険悪なムード。私の言葉には耳も貸さず、いろんな方のアドバイスを優先する夫に「離婚」の二文字が頭に浮かぶほどでした。友達はこのことを「古民家騒動」と呼んでいました。

### 遠い未来のことより 今を大切に生きる

地震から6年後に古民家を再生しました。「使い道はポチポチ考える」

かより、目の前のことを淡々とやってきました。基本的に「毎日おいしいものを食べて、楽しく生きていく」ことしか考えてないんですよ、私。もともとそんな風に思っ生きてきたんですけど、地震を経験したことで「一瞬で何もかも失うことがある」って分かってからは、より一層そう思います。

とにかく楽しく生きていきたい。自分が幸せじゃないと周りの人を幸せにすることもできないですから。



# 益城町が

# 気付かせてくれた 踏み出す勇氣

臨月のときに熊本市で被災した堀口祐子さん。  
二児を出産後、自然豊かな益城町へ移住しました。  
その地で迎えたのは人生の大きな試練。  
それでも前を向くことができたのは、  
挑戦を応援してくれる「大きな器」があったからです。



## お腹にいる子どもを 守ることで必死だった

熊本地震のとき、私は益城町のすぐ隣、熊本市東区に住んでいました。ちょうど長男を妊娠しており、臨月にさしかかるタイミングで前震におそわれました。とにかく恐怖で、私のドキドキが伝わったのか、息子がお腹の中でずっと動いていたことを覚えています。

翌日に兄家族が住む福岡県北九州市へ避難したところ、その日の夜に本震が発生。北九州市は震度4程度の揺れでしたが、前日の恐怖を思い出し、妊娠中で過敏になっていたこともあって、一人でパニックになっていました。

避難先で5月に無事、長男を出産。地震発生から3カ月後の7月には熊本に戻ってきました。余震もほ

とんど収まっている時期ではありましたが、ダイニングテーブルの下に息子を寝かせ、その隣に私が寝る、という生活をしていました。恐怖心が拭えなかつたんです。

自宅から益城町まではすぐの距離でしたが、当時は足を運ぶことはありませんでした。行けなかつた、というか。テレビ越しに見ていた「被災地」の光景を見たくなかつたんです。心が苦しくなるから。益城町に限らず、地震被災の跡がある場所を見ると心がざわつくというのがあったので、避けるようにしていました。

ちなみに長男を産んだのは熊本地震被災直後でしたが、次男はコロナ禍真っ最中の2020年に出産。2人とも優しい子です。大変な時期に

生まれたからこそ、試練を乗り越えられそうな2人だと思っています。

## 益城町への移住後 大きな人生の試練に

益城町に移住したのは、2021年のこと。家を建てることになり、当時住んでいた東区から近いエリアで、自然が多く、子どもたちをゆっくり遊ばせられて、空気がゆつくり流れるようなところに住みたいと夫と話していたんです。すると、ぴつたりの条件の土地が益城町で見つかりました。地震の激震地というイメージはありましたが、もうそのころには「一度大きいのが来たから、大丈夫」と不安はありませんでした。そうして益城町に住み始めたんです。

ですが、ここからが個人的につらい時期の始まりでした。当時、私は片道1時間かけて山鹿市にある企業に通勤していました。ハンドボールの実業団チーム「オムロンハンドボール部」の選手引退後、そのまま同社で社員として勤めており、仕事を完璧に頑張りたいと臨んでいました。

しかし、育休復帰後は時短勤務だったので、フルタイムで働ければもっと評価されるだろうか、などと不安やモヤモヤを抱えるように。仕事も頑張りたい、家でも完璧にしたい。そして自分にはそれができると思っていたんです。

そんなとき「ちょっとおかしい」と感じるようになって。職場でパソコンの画面を見ることができなくなったり、朝、泣きながら出勤したり、子どもを送り出すまでずっとイライラして怒ったり…。病院を受診

PROFILE

1979年、大分県生まれ。山鹿市のハンドボール実業団チーム「オムロンハンドボール部(現・熊本ビューストビンディーズ)」で、11年間活躍。2021年に益城町へ移住。夫と長男、次男の4人家族。



すると「鬱」と診断され、翌日から休職することになりました。

休んだら休んだで、自分の内面に意識が集中してしまって、きつくてきつくて。寝てもきつい。テレビもまったく面白くないし、楽しみや喜びを感じなくなると、本当にきつかった。

近くに頼れる身内もおらず、頼り方もわからなくて、夫に仕事を休んでもらうこともありました。とにかく体を休める。そのことを第一にする時間を過ごしていましたね。

**町の人とのつながりが立ち上がるきっかけに**

少し体調が回復してきたころ、ずっと社会に出ていないことへの不安が生まれてきました。そんなときに目に止まったのが、町の未来を担う女性リーダーを育成する「ましき女性みらい塾」塾生募集のチラシ。

い女性が多く、そこに乗っかりたいなという思いと、音楽記号のフォルティッシモ(非常に強く)を重ねています。まずはネット通販とマルシェイベントへの出店から挑戦を始めていこうと計画しています。

**何でも応援してくれる大きな器に支えられて**

熊本地震から日常が戻ってきたな、と感じるのは、この2〜3年のことです。施設建設や県道の4車線化など、町の環境整備が進み、新しい町の景色が見えてきたこと。そして、私自身がこの町で鬱から少しずつ回復し、周りを見られるゆとりができたこと。その二つが重なった時期でした。

地震後に益城町に移住し、人生の大きなターニングポイントをこの町で迎えました。そこには、益城町が持つ、誰でも受け入れてくれる雰囲気

当時は起業までは考えていませんでしたが、何か勉強したいと思っていました。孤立するのが怖くて、人が集まる場所に行きたい、自分のパワーを補充する時期なのかなと。しかも託児付きで学べる。瞬間的に「行きたい」と受講を決めました。でも、まだ外に出るのはつらかったので、動画のアーカイブ受講から始めました。

そのことをきっかけに、「益城町で頑張っている女性が多いな」と気付いて。彼女たちの姿を見ているうちに「雇われ」ではない働き方に興味を持ち始めました。

体調のいいときにいろいろな場所に顔を出し、いろいろな人と話をしていると、好きなものや自分ができることが仕事になると楽しいな、と思えるようになったんです。

そこで一番やりたかったのが、以前から楽しいと感じていた「レザー

気がありました。可能性がある限りチャレンジしてください、という器がある。地震があったからかもしれないませんが、誰かのために行動する人が多く、そういう人を応援する人や自治体の部署もある。益城町を強くするために人を伸ばす、そんな考えがある町なのかなと感じています。

そんな益城町の大きな器に支えられて、もう一つ頑張りたいことがあります。長年続けてきたハンドボールとスポーツ指導員の資格を生かして、ハンドボールの楽しさを伝えていくことです。益城町にはハンドボールの部活動もチームもないので、まずは競技に触れてもらうところから始めて、将来的にはキッズのチームを立ち上げたいです。

「ましき女性みらい塾」に参加していると、私は自分のことしか見えていないなと感じるんですが、他の方は社会問題に目を向けていたり、

クラフト」。会社で早期退職者の募集があったこともあり、退職を決意。新たな一歩を踏み出しました。

工房で習ったり作品の製作を進めるなかで、2025年8月に、益城町で開催された「ぷら〜ととゆる〜と交流マルシェ」に出店させていただきました。マルシェのメンバーが「行けるよ、できるよ」「あなたならできる」と声を掛けてくれて。作るのも楽しかったし、お客さんの手に作品が渡っていく経験も楽しかった。「これでいけるかも」と感じた瞬間でもありました。

そして26年1月、レザー作家として起業しました。屋号は「e1Free」。 「エルフ(妖精)と「フリー(自由)を合わせた名前、遊び心を忘れずに、自分が表現したいものを自由に作っていきたいという思いを込めました。大文字の「F」は女性を表していて、益城町にたくま

誰かのために、文化を伝えるために、テーマを持って活動されている方ばかりで刺激を受けています。私もこの町に根を張り、視野を広げて活動していきたい。これも、塾の活動に踏み込んだからこそ見えてきた景色です。きっと私は、何かに導かれて益城町に来たのかな、と感じています。

この町で、レザークラフト作家として、そしてハンドボールの活動を通して、「楽しいね」「幸せだね」「いいね」「笑っちゃうね」を、これからも共有していきたいと思っています。



# 自分のことは後回し

## 消防団長として

### 行動した日々

地震発生当時、団長として町の消防団を束ねた本田寛さん。睡眠時間も食事も取れず、その使命感から人命救助や見回り活動に駆け回りました。

ほんだかん  
**本田寛**

元益城町消防団長  
(2016年当時)



### 団の幹部に指示後 法被を手に役場へ

「ご飯茶碗がぼーんと飛び上がった、逆さまになってテーブルに落ちていく。前震が起きたとき、はつきり覚えとるのがこのシーンです。私と妻は自宅にいて、帰宅した娘(当時19歳)がご飯を食べようと自分の横に座った瞬間にドーンと来ました。」

「うわ、地震でかつ」。その後いきなり横揺れが来て、転倒防止を施したスチールラックが背中に倒れてきて、何もかもがガツチャンガツチャンってなつて。動くなんて無理って話ですよ。

揺れが収まった後に外へ。隣の実家に住む両親も含めてけがはありませんでした。「今日は家の中におらん方がいい。車中泊しとけ」と言い伝ったり、けがをした人を移送したりしているうちに朝を迎えました。その日は情報収集と共有、連絡作業に時間を割きました。各分団からLINEに被害状況と写真が上がってきて、役場の建設課職員に情報を提供。「どここの道がこうなってます」「じゃそこに業者を手配します」というやりとりをしていました。

本震のときは役場の2階の総務課にいました。キャビネットがガシャンと転倒して、テーブルといすが東西方向に2mぐらい滑りよつたですね。「せめて窓際に逃げたい」と思ったけど無理でした。部屋の震度計の前に座って、揺れた瞬間に「7」という数字が見えたんです。「震度7なんてそんな何回もあるはずない」って頭がバグりました。それからは避難所を手伝ったり、団員から相談があったら指示を出し

残り、団長としてとにかく「消防団に出らんといかん」という気持ちで町役場に向かいました。

益城町消防団は本団の下に5分団、32班で構成され、当時は600人超が所属。消防団という組織は家庭が優先なんです。自分や家族の安全を確保し、周囲で助けが必要な人々を助けた上で、可能ならば出勤するという前提があるんです。だけん(だから)、私はまず消防団幹部に「家族の安全を確保するように」とLINEで連絡しました。そここうするうちに東の方角に火柱が上がってくるのが見えて、阪神・淡路大震災のイメージが頭によぎりました。「うわ、益城終わった」。もう消火栓も使えんだらう。積載車も出せ

そうじゃないし、団員も出勤できる状況じゃない。常備消防(市町村に設置された消防署)がどうかしてくれることを願うしかありませんでした。地元の消防団たちが消火活動に当たって大事には至らなかったと後で聞きました。

団の法被と持病の心臓の薬だけを持って役場へ。陸上自衛隊で看護師をしている妻もすぐに出勤。町内の弁当店でバイト中の息子(当時21歳)も無事でした。

### 搜索と救助活動、 交通整理も

役場は避難所ではなかったけど、南側の駐車場に人がたくさん集まって来ていました。避難する人を手



たりして、18日には消防署員や団員による被災家屋の一斉搜索と救助活動を実施。道路はあちこち不通になつていたので、団員が手分けして交通整理にも立ちました。

とにかく目の前のことでいっぱい。家族にはしばらく連絡していませんでした。初めて仮眠を取ったのは18日深夜で、結局9時間ぐらゐ寝とらんだったですもんね。家に戻ったのは、地震後10日以上経ってからでした。本震後の判定で自宅、実家ともに全壊。家族はしばらく合志市の姉の家に身を寄せた後、自衛隊の官舎に移りました。

### 夜の巡回を実施 団運営に苦悩も

地震直後から被災家屋を狙う泥棒が出始めたため、震災2日目から消防団で夜の見回りを開始。盗難被害がひどくて、「こんな深夜になん

そこに車止まっつとつと？」という状況もかなり目撃しました。声を掛けると「県外から個人で支援物資を持って来てて、自分で持って行きたいけん場所を教えてください、もう怪しさいっぱい。そういうのがずつとあって、追っ払ったりして大変でした。本当に物資を届けてくださった方もいたのかもしれないが、でもそれ以上に悩んだことがあります。町全体の状況を見たとき、巡回や交通整理の人数が足らん所が出てきて、トップである自分としては人練りをしたかったんです。でも、それができなかった。

同じ町ですが、地域によっては消防団に対する優先の度合いというかが、頼り方や求めるものに若干の違いがあるんです。これほどの非常時だからと本団の指揮に協力してくれる地域もあれば、地元が落ち着くまでは難しいという地域も…。現場で

は大きな負担を強いいる状況にもなつていて、何とかやりくりしようとか会議で話し合つても、どうにもならん。そのときは、もうどうしていいか分からんごと(ように)になりました。いっぱいいっぱい状況だったけど、それでも副団長や指導員、各分団長の支えや協力があって、どうにか乗り切ることができたように思います。

### 仕事場も大きな被害 2カ月営業できず

自分が益城町福田で経営している自動車整備工場は中がぐちゃぐちゃで、オイルが大量にこぼれて全部パー。工具もオイルに浸かりまくってしまいました。2カ月間は仕事にならず収入もなかったけど、その後何とか再開できました。整備工場の隣にある、おばが以前住んでいた家を買って、現在はそこに住んでいま

### PROFILE

1968年、益城町生まれ。陸上自衛隊、JAかみましき勤務などを経て自動車整備工場を開業。20歳代半ばで益城町消防団に入団。妻と子ども2人の4人家族。

す。両親は、元々家があった場所で再建しました。

日常が戻ってきたと感ずるようになったのは…、うーん…、まあ強いて言うなら、自衛隊の官舎を出て福田の家に戻ってきたときかな。「ああ、どうにか帰ってこられた」というのはありましたね。住む場所は変わったけど、そこで仕事をしようとしたし、近所や団員との付き合いもあつたんで。ただ、家族の感覚はちょっと違つたかもしれんですね。

### 熊本地震前より 活気ある町に期待

団長の任期は2年で、地震翌年の3月に退任。通常はそれを機に引退するんですが、災害対応もあつて団員として2年残りました。

町を見ていて、県道の4車線化などは思ったより早く進んでいるなと感じます。でもお店がないんですよ

ね、昼ご飯を食べる店。元々少なかったうえに道幅広げて脇がすぐ民家で、店舗を造る場所がない。せっかく復興すつとなら、人が増えて楽しめる町になつたがよかつたんじゃないかなとかなあ。

防災公園や備蓄倉庫の整備は進んだけれど、小さいのがほとんどでしょ。できるなら消防団本部用の建物造つてほしい。そこに本団用の車を停めて、避難所の代わりにもできて、2階には会議室を造つて備蓄もして。備蓄は避難してきた人にもだし、活動する消防団用にもだし。熊本地震のとき、団員用の食べ物がなかったんですよ。

コロナ禍とかもあつて接触できなかったけんが、消防団同士、団員同士のつながりは薄くなつてる。団員の数も減つとるじゃないですか。地震当時からすると消防団は弱まっているかもしれないですね。

地域のコミュニティは、震災後もそこまで崩れてないんじゃないですかね。離れても帰ってきている人が意外と多いし、新しい人たちも入ってきてる。その辺はいいんじゃないかな。だから今後は、町にもっと活気が出て、若い人たちの仕事がある町になつてほしいと願いますね。

自分は、体はボロボロだけど、人生を楽しく過ごすことをいっぱい考えてます(笑)。音楽が好きで、ライブやディナーショーに行つたり、女性シンガーソングライターの推し活もやっています。懐に余裕があればバイクにも乗りたいですね。





この10年、町は綿密な計画を立てて復旧・復興に取り組んできました。一体どのようなビジョンを描いたのか。2016年12月「益城町復興計画」の策定に携わった学識者4人に、当時の計画策定のプロセスと評価、これからの益城町に期待することを聞きました。

# 「もう一度立て直す」 明確なビジョン示した 創造的な復興計画

鈴木 桂樹

熊本大学名誉教授  
(益城町復興計画策定委員会委員長)

柿本 竜治

熊本大学くまもと水循環・減災研究教育センター長  
(益城町復興計画策定委員会復興まちづくり専門部会長)

澤田 道夫

熊本県立大学総合管理学部教授  
(益城町復興計画策定委員会くらし復興専門部会長)

小葉 武史

熊本学園大学経済学部長  
(益城町復興計画策定委員会産業復興専門部会長)

(司会)  
大沼 健太郎

益城町企画財政課復興企画係長



左から 小葉教授、鈴木教授、柿本教授、澤田教授

## 町民の声重視し 約3カ月で素案

地震後、初めて益城町を訪れたときの様子をお聞かせください。

**鈴木**…私は益城町の総合計画策定に2014年から関わってきました。地震後に初めて訪れたのは5月のゴールデンウィーク明け。自分の目で一度、見ておこうと思って。県道28号を車でノロノロ進むうちに動悸が激しくなったことが、身体的な記憶として残っています。町の光景は熊本市内とは次元が全く違い、町全体が大きな圧力で、上からグシャッとつぶされたようでした。

**柿本**…14日の前震の後、当時の減災型社会システム実践研究教育センターのメンバーから自宅に電話があつて。「益城町がひどいようなので皆で調査に行こう」と、15日の朝、町に入りました。徒歩で被害状況を夕方まで調査し、その夜、メンバーが書いた報告書をウェブサイトにアップした後に本震が起きま

町の復興計画の策定委員として被災後の町を訪れました。私は1995年の阪神・淡路大震災のとき高校3年生で、96年4月に神戸大学に入学したんです。街が焼けたから煙臭がなかなか消えなくて。あと消毒液のにおいと生活臭が入り混じった避難所独特のにおい。益城町の総合体育館(当時は避難所)を訪れたときにその記憶が呼び起こされ、被災者の大変さを痛感しました。

地震から1カ月半後の6月1日、町に復興課ができ、8月5日には「第1回益城町復興計画策定委員会」を開催。約3カ月で素案ができ、12月には復興計画が議会で承認を受けました。計画策定で大事にされたことは。

**鈴木**…住民の声をできるだけ聞くこと、12月末までに復興計画を完成させることの2点ですね。当時、各区の区長さんからは「目の前がことが大変で、町の10年先など考えられない」という意見が多かったです。それでも、町が計画の説明や住民の意見収集のプロ

**澤田**…私は、地震から何日間かは大学内で学生ボランティアの支援をしたり、熊本市ボランティアセンターの応援に行ったりしていました。大学に届いていた大量の飲料水などを、町に電話をして取りに来てもらったことを覚えていますが、また、大学では地下水が利用できたので、容器に水を入れ町の保健福祉センターに届けました。地震後に熊本高森線を見たのはそのときが初めてでした。県道を通っているのに向こうの山が見えるんですよ。映画のゴジラが通った後のようで、学生たちもショックを受けていました。

**小葉**…熊本学園大学内の避難所を運営していた社会福祉学部の教員から指名されて、益城

セスを大事にされたことは評価できると思います。

**柿本**…1点目は、町の地下に断層があるという前提で、防災・減災の観点を計画に盛り込むこと。それで同じような国内外の復興事例を調べたところ、結構あることが分かりました。2点目は、都市計画の前提となる人口フレーム。将来の人口規模の想定のこと、土地利用計画や必要な社会インフラなど都市開発を考える際の基本的指標です。

**澤田**…住民が行政依存にならないよう、住民の力をいかに引き出すか、一人一人の復興をどうするかを重視しました。

**小葉**…私は被災事業所の再建支援をまずやらないといけないと思って。その後は、企業誘致や定住促進、特産品づくりなどについて話し合いましたが、TSMC（台湾積体電路製造）の菊陽町進出による経済環境の変化によって助かった面もあったと思います。

**鈴木**…先見の明があるなと思ったのは、町の復興計画担当部署に若い人を配置したこと。

れるんじゃないか、そんなエネルギーのようなものを感じました。そういう感情で風景を見ると、地震で崩れて残っている屋根が、つぶれてそうだったんじゃないかと、なんか地面からニョキッと出てきたような、今から伸びていくぞみたいなの。それがすごく印象に残っていますね。

計画そのものについて言えば、町の将来像・目標を掲げ、他方では震災後の現状あるいは課題を整理しておいて、その間のギャップをどうやって埋めていけるかという構造になっていて、かなり分かりやすい。状況を俯瞰した文章としてとても評価できると思います。一方で「復旧」にこだわる、昔のままに帰りたいという思いはどうしてもある。予定調和的には重ならないわけで、計画を読み込んでいくと、そうした思いと創造的復興との調整が新たな課題として見えてくる。そうした意味でも重要な文書になっているんじゃないかな。

**柿本**…復興計画の中には、ハード整備の規模



つまり、これから何年もかかるから。この委員会の人選もそういう配慮があったんじゃないかと思うし、非常に重要な観点だったと、当時から今も思っています。皆若かったから、10年経ってもこうして集まれる。

**大沼**…委員会の先生方が計画完成後も益城町にずっと携わり続けてくださることが本当にありがたいことですし、我々役場はすごく恵まれていると思います。

**すべきこと明確にした  
推進力となる計画に**

町では「復旧期」「再生期」「発展期」の3段階に分けて復興事業に取り組んできました。最初の復旧期をどう見ておられますか。

**鈴木**…地震の年の秋に木山神宮で例大祭がありましたよね。神殿が崩れて屋根だけが置いてあるお宮さんで、舞を奉納したり祝詞をあげたり余興をしたり。皆さんが笑顔だったのがとても印象的で。復興計画ができたら皆さんがそれを支えて、より豊かにしていって

は明記されていませんでした。復興計画に基づき復興事業が計画され、たとえば、道路幅の規模が明らかになったとき、立ち退きや商売の再開がどうなるのか、拡幅したら自宅が道路沿いになってしまうのではないかと、などを心配される人たちがいました。一人一人のケアまでは難しいけど、次のプロセスをどうするかを少しでも入れておくとよかったですかなとも思います。

**澤田**…短期間できちんとした計画ができたと思います。復興計画に明記したことはやらなきゃいけないこと。そのためにも、もっと「横車を押す」ような無理な要求を国や県にしてよかったんだろうけど、熊本の人は積み重ねたのか、そこまではしなかった。代わりに、じゃあどうやって実現するってところで、踏み込んだことを盛り込んだこの計画は大きな推進力になったのではないのでしょうか。

**小葉**…ある意味、当たり前のことが書いてあるんですよね。産業の発展についてちゃんと触れてあって。それで復旧期においては、事

業の再建が重要になるんですけど、町職員の皆さんのおかげで、しっかりサポートされていたと思います。計画を着実に実行してきたことで、周辺に生じた変化を積極的に能動的に取り込めていると感じますね。

### 大事なのは特性生かす 自分たちのまちづくり

——震災前の町の人口は約3万4500人。震災後の3年で約1500人減少したものの、2019年から回復に転じ2025年12月は約3万4400人に。さらに発展していくためには何が必要と考えますか。

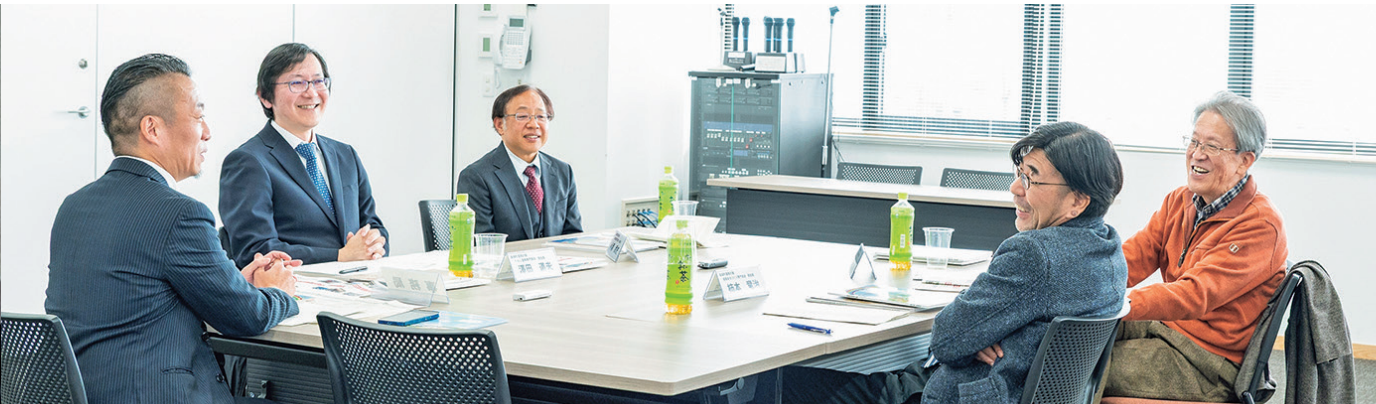
**鈴木**…復興計画を振り返ると、毎年毎年、定期的に検証や見直しをするローリング方式を取り入れて、基本計画をバージョンアップできたことはとてもよかったと思います。震災の後には新型コロナウイルス感染症が流行しましたが、臨機応変に対応し、復興を目指して一本、筋を通せたのではないのでしょうか。

**澤田**…県道28号の4車線化や庁舎の建て替え、

いので。他の手段としては企業誘致もありますが、なかなかハードルが高い。となると、週末などに遊びに来てくれる人、訪れる人を増やすことが現実的のように思います。たとえばロードバイクが楽しめる自転車道の整備なんかどうでしょう。私の趣味でもあります。台湾の人でも自転車好きが多いと聞きます。

**鈴木**…そういう発想ができるのが町のロケーションかなとも思います。TSMCの工場から少し離れている益城町は、いい意味で半導体関連企業集積の熱狂に巻き込まれていない。波及効果を受けつつ、ある程度の距離感を生かしていくべきだと思いますね。

**澤田**…熱狂に巻き込まれないで自分たちのまちづくりをすることは大切ですね。益城町は熊本市のベッドタウンのように見られがちですが、地区ごとに特性があるので、それぞれに合った地域づくりや産業のあり方があると思います。



バスターミナルの整備などが進められ、町の姿が変わりました。震災は不幸な出来事だったけど、復興計画で町の未来の姿を示せたことよって一気に進められた気もするんですよ。人口が一時減りながらも増加に転じたのは、暮らす場所として益城町が選ばれたということ。

**柿本**…ただ復興計画では、役場周辺は都市拠点として町の中心部に位置づけられていて人口を増やす方向でしたが、逆に減っているんですね。これからは土地の高度利用を考えていかないといけなくて、再活性化するのは外部の力を利用しないと厳しいのかもしれない。ハード面で取り組むのは難しいから、人材をどうやって育成するか。創業支援など、町にはインキュベーション的な役割が必要とされるんじゃないでしょうか。

**小葉**…TSMCのある菊陽町や隣の大津町、そして熊本市内で働く人たちが益城町に定住するのは難しいかな、と。益城町の地価が安いといっても、移動できる公共交通機関がない

### 益城を愛する「人」の ポテンシャル引き出して

——これからの益城に期待することは。

**鈴木**…「いい町になる」ための万能薬はないでしょうが、益城町に住む人には単なる住民ではなく、町の構成員という自覚を持つ「町民」としての意識を持ってもらえたらと思います。そして、ささいなことにも声を上げていただきたい。行政には、地域の皆さんの視線が熊本市ではなく、地元に向くような仕掛けも必要だと思います。

**柿本**…町民と町職員がこの10年でかなり入れ替わってきているんですね。震災を経験した人、していない人の「当たり前」が違ってくる。だから、これからの復興とか地域づくりに対してどうすり合わせていくか、共有することが大事で。発想とか知恵をいろいろと出していくべきでしょうね。

**澤田**…益城町という自治体はとてもパワーアップしたと思っています。だから今度は町

益城町のいま

# つどい

地震後、かつてのにぎわいを取り戻そうと、伝統的な祭りを復活させたり、町民主体で復興イベントを行ったり。新たなコミュニティも誕生し、子どもたちの楽しそうな声が響き渡ります。



## どんど焼

冬の風物詩。各地区で行われ、多くの人でにぎわう。

## ジョギングフェア

33回目を迎えた2025年大会では1725人のランナーが「テクノリサーチパーク」内を駆け抜けた。



民のポテンシャルをもっと引き出してほしい。私が携わった災害公営住宅の建設の際、地域住民の声を基に作成した要望書を町に提出しました。町民同士による「共助」の力が高く評価され、その地域は2023年度の「ふるさとづくり大賞」奨励賞（総務大臣表彰）を受賞したと聞いています。自分たちで一生懸命、自分たちの暮らしに関わるんだっていう、その姿勢が重要だと思う。自分たちのことを自分たちで考える町民がどんどん増えていってほしい。だから町には、町民が意見とか力とかを発揮できるような仕組みづくりを期待しますね。

**小葉**…人口が増加に転じたということはとても良いこと。私のゼミにも益城の学生がいっぱいいて、口々に「益城はなんもないけん」と言うんですよ。でもそれを私が言ったら怒られる（笑）。それだけ益城のことが大好きなんです。地震後、結構早く飲食店を再開したところもあって、「もう一度立て直すんだ」というものすごいパワーを感じました。



町の皆さんがチャレンジできる新しい目標があれば、力がまとまるように思います。震災後に行われた「益城町未来トーク」のような場で、意見を出し合ってもらうのもいいんじゃないでしょうか。

**大沼**…震災からの10年を振り返るとともに、今後の益城町にとって大事な視点、意見をたくさん頂きました。ありがとうございました。





9年ぶりの打ち上げ花火

### みんなの秋祭り

2024年11月に開催。フィナーレの花火は、町民それぞれの思いがこめられた特別なものとなった。



## 益城町に気球を 飛ばそうプロジェクト

ボランティア団体による熱気球の体験飛行  
が町内の小中学校の校庭で行われた。



## 木山神宮祭

神殿と拝殿が全壊した木山  
神宮。秋の例大祭では、氏子  
が剣を使った舞を披露。



追悼や復興の祈り  
伝統行事の再開など  
各地でイベントが  
行われた

## 竹灯籠

竹灯籠を並べる追悼行事  
「4・14のつどい」。各仮設団  
地から震災記念公園へと場  
が移り、毎年続いている。



## マシキラリ

2022年5月に誕生した複合施設。飲食をはじめとしたさまざまな業態の店が並ぶ。

## サンジ像

復興プロジェクトの一環として交流情報センター「ミナテラス」に設置された漫画『ONE PIECE』のサンジ像。

©尾田栄一郎 / 集英社



## 潮井自然公園

川遊び、キャンプができる町の新スポット。休日は多くの家族連れでにぎわう。

キャンプ場を兼ねた公園や  
コンテナ複合施設など  
新しい町の顔も登場



小6だった僕は、冷たい弁当から温かい給食が提供されてうれしかったです。あの時の関係者のみなさんに感謝しています。 村上太騎

自衛隊の皆様ありがとうございます。 本田光照

同業者から応援、水、倉裡届けて 感謝申し上げます。 松岡毅

感謝 あいさつ

増田邦子

TV局 新聞社 ボランティアの方々に 全国の友人達の心意気に触れました 縁が更に深まりました

地震直後、近所で声かけ合っ 杖を持ち寄り、温かい食事と いたいただきました。 地域のつながりがありがたかったです 菊川洋子

あの時、恐ろしく外を歩けなかった。 様々な人の支障と仲間の絆が のりこえた。たくさんやさしさを ありがとうございます。 後半

篠原晴美

ライフハウスを営む私の元に全国の音楽関係者から 義援金や物資が寄せられました。 これほど多くの社会者へ届ける事が出来、感謝していません 花香竜也

水道復旧後、蛇口から水が出た時の感重は、一生忘れません。 工事の為に果外から来て頂いた業者の方、ありがとうございます。 富田 敬